

# 初対面雑談における連鎖構造分析の一考察

—共有からはじまる連鎖組織を中心に—

張 良 光\*

## 1. はじめに

自由な会話というイメージが強い雑談は、勧誘や依頼のような課題遂行といった性格を強く持たない会話であるが、初対面での印象が、その後の人間関係に影響を及ぼすため、様々な制約があるといえる。つまり、初対面雑談は、無作為に話題を展開させているとは考えられず、単に自由な会話とは言えないのである。

そこで本研究は、初対面というお互いの情報が少ない中での雑談に焦点を当て、そこでの会話の規範や規則を構造的に明らかにすることを目的とする。

## 2. 先行研究

### 2.1 初対面雑談の連鎖組織について

初対面の雑談において連鎖組織を話題と見立て、その話題の対象について研究を行ったものに張良光 (2015a) がある。張良光 (2015a) によると、初対面雑談は、質問からはじまることが多いと考えられたが、実際は質問からはじまらない話題も少なくないことがわかった。そして、話題の対象を調査した結果、質問は「会話参加者」、意見（自己開示）は「会話参加者」と「事柄」、そして共有は「事柄」について話される傾向が見えた。さらに、この初対面雑談の質問からはじまる連鎖組織について研究を行った張良光 (2015b) では、

第三発話に「理解」<sup>1</sup>が表れるものと「評価」<sup>2</sup>が表れるものに差が見られた。

しかし、これらの研究は、初対面雑談の話題と質問からはじまる連鎖組織の分析にとどまり、共有からはじまる連鎖組織についての言及がない。

### 2.2 共有からはじまる連鎖組織について

共有からはじまる連鎖組織は、自分と相手が同じ情報や意見を共有している（はずだ）ということを示す発話によって開始される連鎖である。特に、初対面で共有できることは限られ、共有からはじまる連鎖組織は、会話しているその場にあるものや容姿について語られることが多い。そして、会話が重ねられていくと、お互いの情報が徐々に開示され、共有できる部分が広がってくる。こうして共有する部分が重なることによって、お互いが親しくなっていくのである。

この連鎖組織にも、質問と自己開示がある。共有の質問からはじまる連鎖組織とは、自分が相手と共有しているはずの情報が、思い出せないということ伝え、相手に思い出してもらおうとする〈想起要求〉の発話で開始されるものである。一方、共有の自己開示からはじまる連鎖組織とは、相手と共に経験した出来事を思い出して語り合う語りの発話で開始される連鎖、あるいは相手も同じ意見である（はずだ）と期待して意見を述べる〈共有意見提示〉の発話で開始されるものである。

また、この連鎖組織は、それぞれ個別に経験した出来事を話し合い、その経験に対する捉え方や感じ方をお互い承認し合うことを通して、協働で「一つの経験」として形作る。記憶の機能を分析

\*高麗大学大学院生

した高木（1990）によると、出来事の記憶を語り合うという行為は、その出来事を経験した集団にとっての歴史形成の第一歩であると述べている。人々は、出来事の語り合いを通して、一人では想起することのできない、出来事のような側面を把握して再構成し、再構成した出来事を、共に想起したメンバーの「公式見解」として共有するのである。こうして形成された出来事は「共有経験」として位置づけられる。

「お互いが「同じ」であることを表す方法は、日本語において、様々な種類の言語形式に反映されている。共有の連鎖組織を開始する発話タイプについて言えば、想起要求での記憶の確認を表す「～っけ」、語りの発話における「～したね」、意見提示での形容詞＋終助詞「ね」など、非共有の場合と異なる形式が用いられ、共有経験や共有知識、共有の意見であることが表される。」（筒井2012：206）

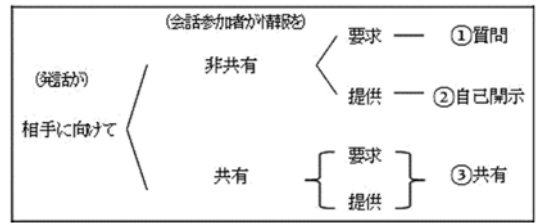
本研究は、初対面雑談における共有からはじまる連鎖組織を中心に、公式見解という観点から分析をおこなう。

### 3. 分析方法および資料

#### 3.1 分析方法

本研究は、発話ひとつひとつを連ねていき、それを話題と仮定する。話題開始の認定としては、Schegloff & Sacks (1973) の隣接ペア (adjacency pair) を参考に、情報の共有、非共有という観点から情報要求あるいは、情報提供ではじまるものに分類する。分析にあたっては、神尾（1990）の情報のなわばり理論、筒井（2012）の分析の枠組み、そして張良光（2015a,2015b）の分類を使用する。

本研究で扱った資料に表れる連鎖組織の第一発話のタイプ別分類を、〈図1〉に示す。①質問は、相手の情報を得ようとする情報要求などの質問からはじまるものであり、②自己開示は、まず自分



〈図1〉連鎖組織の第一発話のタイプ別分類

の情報から開示する情報提供などからはじまるものである。③共有は、会話参加者が共有している情報を扱うものであり、共有している情報であるため、それを要求あるいは提供しても、結局どちらも確認作業となるため、まとめた。

さらに本研究は話題の低位分類として、話題の対象について分類する。それが会話している現場なのか、外なのか、また人物なのか事物なのかを考慮し、会話参加者（会話に参加している）と第三者（会話に参加していない者）、そして事柄と分類した。その結果、参加者を対象にした話題は、まず時間軸に「経験（過去）・状況（現在）・予定（未来）」、名前や年齢、出身などの「プロフィール」、きっかけなどの「理由」、韓国語や料理などの「能力」、それに「習慣」、「好み」と大きく8つに分類され、共有からは、「プロフィール」と「経験」が表れた。第三者を対象にした話題は、2分類でき、事柄を対象にした話題は、24認められ、そのうち「場所」、「文化」関係が多くみられた。

本研究は、共有からはじまる連鎖組織を〈想起要求〉からはじまるものと、〈共有意見提示〉からはじまるものと二分類し、分析を行う。その出現率は、〈想起要求〉の方が〈共有意見提示〉より多く現れる傾向がみられ、また〈共有意見提示〉は単独で表れることが難しいことがわかった。

#### 3.2 分析資料

分析資料は、KUJE（高麗大学日本語教育）談話コーパスを扱う。日本語母語話者間の初対面男女の対面二人雑談10件、総録音時間数約352分、総発話数5142である。文字化の方法は、曹英南

〈表1〉初対面雑談の被験者属性データ

データ	会話参加者 (年齢/性別)		録音時期	録音時間	発話数
(a)	A (28/女性)	B (31/男性)	2011年10月	約38分	770
(b)	C (36/男性)	D (31/女性)	2011年12月	約41分	597
(c)	E (20/男性)	F (23/女性)	2014年1月	約33分	399
(d)	G (38/男性)	H (22/女性)	2013年12月	約33分	475
(e)	I (24/男性)	J (28/女性)	2014年1月	約33分	382
(f)	K (28/男性)	L (23/女性)	2014年3月	約33分	457
(g)	M (25/男性)	N (24/女性)	2014年1月	約32分	653
(h)	O (33/女性)	P (21/男性)	2013年12月	約35分	622
(i)	Q (20/女性)	R (28/男性)	2014年2月	約37分	384
(j)	S (29/男性)	T (20/女性)	2014年2月	約37分	403

(2013) にしたがった<sup>3)</sup>。

#### 4. 分析および考察

##### 4.1 想起要求からはじまる連鎖組織

共有知識や共有経験について、それを共有する相手に対して尋ねる際には、そのことを知っているという形で情報要求をすることが期待される。つまり、共有していることが前提であるため、それを伝えないことは不適切なのである。したがって、想起要求の発話は、記憶の確認を求める形式を用いることが考えられ、「今から質問する内容はあなたと共有している（はずである）ことについて尋ねる」ということを表現する。

##### 4.1.1 記憶確認を求める形式

想起要求は、相手が知っていることを前提になされる発話である。その連鎖組織としては〈想起要求－回答〉という隣接ペアが成立する。共有していない事柄を質問からはじめるものと、共有している事柄を質問からはじめるものを比較すると、前者は情報要求が疑問を表す終助詞「～か」で代表される疑問文の形式を取るのに対し、後者は「～っけ」「～た？」という記憶の確認を求める形式が見られる。

この想起要求からはじまる連鎖組織は、相手の知っている、間違っていないであろう情報を連鎖組織のはじめで、あえて確認することによって、

活発な情報交換の場とする効果が見られた。この連鎖組織をまとめると、次のようになる。

〈連鎖1〉

01A：想起要求「～っけ？/～た？/～よね？」

02B：回答「ええ/はい/～ですね/V-ます」

03A：情報要求

04B：情報提供

A/B：確認要求

B/A：確認提供

##### 4.1.2 想起要求型の否定疑問文

共有からはじまる連鎖組織には、否定疑問文の形式「～不是吗」「～じゃないですか」で発話するものが9つあった。本研究は、評価という面が表れる形容詞が伴う否定疑問文は、意見/評価という性格が強く、それに対して同意、不同意を求めることから、〈共有意見提示型否定疑問文〉とする。一方、「動詞」や「名詞」など形容詞以外の否定疑問文の形式を〈想起要求型否定疑問文〉とし、ここでは想起要求型の否定疑問文をみていく。

〈想起要求型否定疑問文〉は、その行為や行動などを思い出させることによって会話参加者間の話題についての背景知識を整えるような効果がみられる。この連鎖組織は想起要求14の事例中、6認められた。

この〈想起要求型否定疑問文〉は、これから話

す、話そうとする意見に対して共感が得られものなのかどうかをまず確認する作業とも言える。親しい関係では、意見の対立が見られた連鎖組織だが（筒井2012）、初対面雑談においては意見対立は好ましくなく、こういった背景知識の確認作業を行い、対立を避けようとするのも一つのストラテジーとして挙げられる。

また、想起要求に対して、想起要求で答えることによって、詳しい共有意見を構築させていく様相も見られた。会話参加者双方がすぐに回答を提示できないため、この協働型の想起では、双方が回答を思い出し、それを提示し合って、両者が納得できそうな回答を協働で構築するという作業が行われる。「両者が「思い出せない者」としての立場を取った以上、お互いに協働で答を思い出すというやりとりの仕方が指向されることになり、その具体的な表現方法として、自ら確定的なことを言わないで相手に委ねるという方法が取られる」のである。（筒井 2012：2013）この連鎖組織をまとめると、次のようになる。

〈連鎖2〉

- 01A：想起要求「～じゃないですか」  
02B：回答「～よね/～ね/はい」  
03A：共有意見提示「～から/～よ」  
04B：同意見提示「なんか/～からね/～だって」  
05A：想起要求「～ですよね？」  
06B：想起要求「～じゃないですか？」

共有経験の確認作業を行うことは、会話参加者間の関係性の確認につながる行為であり、雑談における人間関係の構築という側面を象徴するようなやりとりであると言える。

#### 4.2 共有意見提示からはじまる連鎖組織

次に、会話参加者が共有している経験や知識について意見を提示する連鎖組織をみる。共有している出来事についての意見提示は、相手も同じ意見を提示することによって、お互いにそれを一つ

の「公式見解」として認めていく作業などがみられると考えられる。

共有経験の語りは、会話参加者が過去に共に経験した出来事について、思い出して語り合い、一つの語りを構成する連鎖である。年齢や出身地などの生い立ちといった情報が全くない初対面という場面では、共に経験した出来事というのは、なかなか探せない。しかし、本資料データからいくつかの共有している出来事が現れた。本資料データの被験者は、留学や仕事で訪韓中の日本人であったため、韓国での出来事について共有していたものが現れたと考えられる。これは、参加者が個別に経験した同種の経験=共通経験を会話の中で発見し、それを語り合うことを、参加者が「今ここで共有経験として経験し直している」（串田2006:261）という指摘のとおり、韓国で日本語母語話者である参加者が個別に経験した同種の経験を共有経験として構築していく様相が見られた。

#### 4.2.1 共有経験、共有知識を構築する形式

この連鎖組織は、まったく新規の話題として開始されるのではなく、共有経験の話題の後に会話参加者間でその共有経験に対する意見を共有する作業として開始されたり、一方の会話参加者に関する事態が話題にされた後に、その事態を一般化した形で意見を述べ合い共有する作業として開始されたりする。この連鎖組織は、意見に対して同意するのか、しないのかという〈意見提示-同意/不同意〉を隣接ペアとする。

この連鎖の特徴としては、Bの提示した意見と似たような意見をのちにAが提示するという点が指摘できる。そのため、発話の繰り返しや、オーバーラップ、引き取りなどによる共同で構築していく発話が見られる点がみられた。

意見提示の後、その意見の根拠説明がされることが筒井（2012）の研究では指摘されているが、初対面資料である本資料からは根拠説明の発話は必須ではないといえる。それは、この連鎖組織が、同じ意見を提示し合って、一つの意見として共有

する作業、つまり公式見解の構築を第一の目的としているからではないかと考えられる。この連鎖組織をまとめると次のようになる。

〈連鎖3〉

01A：共有意見提示「～でしょ/～よね/～けどね」

02B：同意表明「そうそう/そうですね/でしょ/～  
ね/～もんね/[言い換え]」

03A：意見提示「～から」

04B：同意表明

05B：同意見提示「そうですね/～からね」

06A：同意表明

#### 4.2.2 共有意見提示型否定疑問文

形容詞は、評価という面がある。そのため、聞き手はその評価に対して、同意あるいは不同意という立場を明らかにする必要がある。初対面の雑談では意見の対立を避ける傾向があるため、聞き手は同意見を提示する確率が非常に高く、それを予測しているかのようにあいづちは、理解のあいづちだけでなく、言い換え発話や繰り返し発話が表れる。この連鎖組織は共有意見提示7の事例中、3認められた。

共有意見提示型否定疑問文の連鎖組織は、串田(2006)の指摘のとおり、参加者が個別に経験した同種の経験を共有経験として構築していく顕著な事例といえ、双方の発話により共有意見が構築されている様相が見られた。この連鎖組織をまとめると、次のようになる。

〈連鎖4〉

01A：共有意見提示「(形容詞) ないですか?/(形容詞) じゃないですか?」

02B：同意見提示

03A：理解、言い換え発話、繰り返し発話、オーバーラップ

04B：同意見提示

共有意見提示からはじまる連鎖組織は、お互いが同じ意見を有していることを確認し合う連鎖組織である。この連鎖組織の現れる位置の特徴としては、すでに共有経験や共有知識が話題となつて一段落した位置と、一方の経験の語りや意見の提示が終わったところで、一般化した話題へ移行しようとする位置であるという点が挙げられる。よって、共有意見提示が単独で現れるよりも想起要求と一緒に現れる傾向が見られたのではないかと考えられる。相手と同じ意見を有しているかどうかは、それを話題に取り上げてみなければわからない。それにも関わらず、相手と共有するものとして提示し、二人の意見を一つの「共有物」とする方法は、雑談の展開における一つの到達点を生み出すような作業である。これは、雑談という課題遂行の弱い会話においてのひとつの課題遂行の目的ではないかと考えられる。

#### 5. おわりに

本研究は、初対面雑談においての部分的報告からはじまる連鎖組織を分析した。その結果、想起要求からはじまる連鎖組織から2種類、共有意見提示からはじまる連鎖組織から2種類、あわせて4つの連鎖組織を提示した。これらの連鎖組織は、個別に経験した出来事の一つの「共有経験」として構成していくやりとりであり、「公式見解」を構築していた。今回は、母語話者同士の初対面での雑談を資料に分析をおこなったが、日本語教育へ応用するためには接触場面の初対面雑談資料を扱う必要がある。また、本研究のデータでは、共有からはじまる連鎖組織が現れないデータもあった。どのような状況において、共有からはじまる連鎖組織で話題を開始することが可能なのかということも、重要な研究課題であり、これらについては今後の課題とする。

参考文献

- 장양광 (2013) 「일본어모어화자의 화제전개양상에 관한 일고찰 -토론에서의 화제의 형태를 중심으로-」 『일본문화연구』 제45집, 동아시아일본학회, pp.471-490.
- 張良光 (2015a) 「初対面雑談における連鎖組織の一考察 -話題の対象を中心に-」 『日本語教育』 78, 한국일어교육학회, pp.27-38.
- \_\_\_\_\_ (2015b) 「初対面雑談における連鎖構造分析の一考察 -質問からはじまる連鎖組織を中心に-」 『일본문화연구』 55, 동아시아일본학회, pp.287-307.
- 曹英南 (2013) 「韓国語と日本語の割り込み発話の対照研究」 『일본어문학』 제59집, 한국일본어학회, pp.37-56.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』 大修館書店.
- 金水 敏, 田窪行則 (1990) 「談話管理理論から見た日本語の指示詞」 金水・田窪 (編), 『指示詞』 ひつじ書房.
- 串田秀也 (2009) 「聴き手による語りの進行促進：継続支持・継続催促・継続試行」 『認知科学』 第16巻第1号, pp.12-23.
- \_\_\_\_\_ (2006) 『相互行為秩序と会話分析：「話し手」と「共一成員性」をめぐる参加の組織化』 世界思想社.
- 高木光太郎 (1990) 「何のための記憶カーフラッシュバルブメモリーの機能論」 佐伯胖・佐々木正人 (編) 『アクティブ・マインド：人間は動きの中で考える』 東京大学出版会, pp.141-170.
- 田窪行則 (1989) 「名詞句のモダリティ」 仁田義雄・益岡隆志 (編) 『日本語のモダリティ』 くろしお出版, pp.211-233.
- 筒井佐代 (2012) 『雑談の構造分析』 くろしお出版.
- 入野野みはる (2004) 「ヘッジの形とその機能 友人間の会話に見る」 南雅彦・浅野真紀子 (編) 『言語学と日本語教育Ⅲ』 くろしお出版, pp.287-304.
- 花村博司 (2014) 「日本語の雑談会話における話題転換研究の方法：話題転換はどこで行われ、どう分類されるか」 『言語情報編』 9, 言語文化科学研究, pp.71-99.
- 深田博己 (1998) 『インターパーソナル・コミュニケーション-対人コミュニケーションの心理学-』 北大路書房
- Berger, C.R., & Calabrese, R.J. (1975). Some Explorations in initial interaction and beyond: Toward a development of a theory of interpersonal communication. *Human Communication Research*, 1, pp.99-112.
- Fraser, B. (2010). Pragmatic Competence: The Case of Hedging. In K. Gunther, W. Mihatsch and S. Schneider

- (Eds.), *New Approaches to Hedging (Studies in Pragmatics)*, Bingley: Emerald Group, pp.15-34.
- Holmes, J. (1995). Soft and low: Hedges and boosters as politeness devices. In J. Holmes, *Women, men and politeness*, London: Longman, pp.72-114.
- Schegloff E, A, Sacks H (1973) "Openingupclosings", *Semiotica*8, pp.289-327.

注

- 1 理解とは、単純に提供された情報を受け取ったという意味であり、例として「うん」「はい」「ええ」「そうですね」等があげられる。
- 2 評価とは、提供された情報に対して、単にその内容を理解したことを示すのではなく、その情報に対する関心や驚き、意外な気持ちなど、その情報の理解以上の評価的な判断を表すものであり、例として「すごい」「おもしろい」等の評価形容詞等があげられる。
- 3 ①発話の単位：話者が交替するたびに改行する。  
②同時発話の場合、以下のように記入。  
例) A発話：そんなこと [ないし]。  
B発話：★乗れよ。  
A発話の「[ ]」の「ないし」とBの「★」の「乗れよ」が重複していることを意味する。
- ③疑問文(上昇調)：「？」をいれる。
- ④言い淀み：「…」をいれる。
- ⑤笑い：[笑いながら] [二人で笑い] [ははははは] で記する。
- ⑥聞き取り不能：「#####」をいれる。
- ⑦プライバシー保護：名前や学校など固有名詞は明記しない。
- ⑧ポーズ：[少し間] または [沈黙 2秒] で示す。